緊急特集

飢餓と戦火のアフガニスタン

ペシャワール会・中村哲氏の講演要旨

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆

11月17日、東京の社会文化会館で「中村哲医師東京公演実行委員会」主催による、ペシャワール会中村哲氏(医師)の講演会「飢餓と戦火のアフガニスタン」がおこなわれた。中村氏は、1984年からパキスタン北西辺境州の州都ペシャワールで、医療を中心とした住民支援活動を行っている。文化の違いにより、女性には「服の上から聴診器を当てる」など、アフガニスタンでの体験をもとに現状を報告。また「なぜ世界で一番豊かなアメリカが、世界で一番貧しい国の一つにあんなにムキになるのか」とアフガニスタンへの攻撃に疑問を投げかけた。中村氏の講演要旨を紹介した。なお、保団連では、報復戦争はさらなるテロと報復の連鎖を広げるとして軍事報復に抗議している。また、テロ撲滅に向けた国際法と理性による解決への道を主張している。

命綱の雪が消える

ペシャワールのあるパキスタン北西部は、標高6000～7000メートル級の山々が連なる山岳部にある。接しているアフガニスタンとは密接な関係がある。政治的にはパキスタンに属しながら、アフガニスタンの文化を持つ。

ペシャワール会は、このような地域にハンセン病のコントロール計画を中心とした、診療所の建設を行ってきた。会員4000人が、全くのボランティアで運営を行っている。ペシャワール会では年間1億円の予算の95%を現地に送っている。

現在難民支援の「いのちの基金」に取り組んでおり、是非ご協力いただきたい。

アフガニスタンの降雨量は日本の200分の1。寒暖の差が激しく、冬には雪が降り、夏は40度を下回らない。冬に積もった雪が解けて川沿いに豊かな農業地帯を生み出す。人口の75%が農民または遊牧民であり、「お金がなくても生活できるが雪がなくては生きていけない」と言われている。しかし、いまやその「雪」が消えつつある。

貧富の差と文化の違い

アフガニスタンではモスク(イスラム寺院)を中心に街が成り立っている。街はジルガと呼ばれる「長老会議」が、慣習法に従い治めている。警察は交通整理くらいしかしていない。人を殺したものは殺される。婦女暴行も死刑。刑の執行は住民が行うが何のおとがめもない。

貨幣経済にまだなっていないところもある。貧富の差が激しい。数百円ないために命を落とす人がいる一方、ちょっとした病気でもアメリカやイギリスに治療に行く人もいる。

文化や習慣の違う人とどうつきあうかが難しい。例えば男女問題があげられる。女性はブルカと呼ばれるベールをつけて、人前では肌を出さない。旅行者が顔を出して歩いていると、ふしだらな女と思われ声をかけられる。私は医者なので患者の顔は見るができるが、肌は見るができない。服の上から聴診器をあてている。

このような文化の違いを認めないで、いい悪いで判断するとトラブルになる。そのため

現地の人と争いを起こし国外追放になる。追放された人は「ひどい男女差別だ」と報告すれば拍手喝采を受ける。しかし、そんなことをしても患者は救えない。土地土地の文化をよく理解して関わるのが大切である。

全ての人を持つ親日感情

1984～91年は内戦が激しかった。私は難民キャンプでハンセン病患者を診ていた。しかし、ハンセン病だけ見てればいいというわけにはいかなかった。目の前で死にそうな患者に、「ハンセン病でないので診ない」とは言えないからだ。ハンセン病が多いということは、マラリアや腸チフスなどの感染症が多いということであり、感染症の多い地区は無医地区である。

内戦後タリバンの支配になった。タリバンに従うかどうかはジルガが決定する。アフガニスタンの人は平和なときは農業をしている。戦うときには、女、子供は難民キャンプへやり、男は銃を持って戦う。

アフガニスタンでは距離の単位が違う。キロやマイルではなく「歩いて何日」という。「すぐ近く」は「歩いて2～3日」ということ。向こうの人は1日や2日歩くのはなんでもない。移動は山の中を何日も歩いておこなう。

山の中では、生まれてから一度も外国人を見たことがない人がいる。私を見て「フランス人ですか」と聞いてきた。さすがにびっくりした。しかし、どんな田舎でも「日本人」という態度が変わる。日本について知っていることは、日露戦争と、広島、長崎くらいで、「日本はオランダの隣か」というレベル。「私も日本に行きたいが歩いて何日くらいかかるのか」と聞かれた。しかし、日本人には非常に親近感を持っている。そのおかげで欧米人であれば死んでいたかもしれないようなときも、日本人であったので命を救われた。

1979年～88年にソ連侵攻があった。10年の抵抗の末、ソ連が撤退したら難民も帰るだろうということで、世界から200億ドルの援助があった。しかし誰も帰らなかった。内戦でアフガニスタン国内は危険だったからだ。

1991年に湾岸戦争があり、アジアだけを残して、欧米人は真っ先に逃げ出した。1991年にソ連が崩壊すると内戦は農村部から都市部へと移動した。その後1992年5月から12月にかけて農村部に難民が帰りはじめた。安全だと思ったので、270万人の難民のうち200万人が誰の手も借りず、誰からも援助されることなく帰っていった。

診療所にロケット弾が

ペシャワール会は、帰っていった難民を支援する形で次々と診療所を建てた。マラリアが大流行した。悪性マラリアには安いクロロキンが効かない。ペシャワール会の診療所がカバーしている人口は70～80万人くらいだが、5000人以上がマラリアで死んだ。

どんなにがんばっても1日に200～300人を診るのが限度。「申し訳ないが明日きてくれ」と言って断ったところ、診療所にロケット砲が打ち込まれたことがあった。診療所の職員が2名死んだ。外出から帰ると18人の

スタッフが報復の準備をしていた。アフガニスタンでは、死には死をもって償う。

2人殺されたら2人殺さないと恥になる。報復は「当然」と思っている。私が「報復はいけない」と言うと皆きょんとしていた。「皆殺しになっても報復はいけないのか」と聞かれたので「いけない」と答えた。「ここで発砲したら診療所の計画が続かない。しかし、自分たちが死んでもペシャワール会には多くのスタッフがいるので、すぐ次の人が来て計画が進む。計画が進まないということは10万人の患者が助からないということだ」といって説得した。

井戸を掘り難民をくい止めた

ペシャワール会は山の中に診療所を建てている。よく「中村は山好きだから」と言われるがとんでもない。みんなが行かないところ、みんながやらないところを重点的に行く。みんなが行くところは我々がやらなくても誰かがやる。

今、早魃により雪が減り水がなくなりつつある。カブール川が枯れている。飲み水が枯れ、井戸水が枯れ、家畜が死ぬ。家畜が死ぬと人々は農村から離れる。人間は食べ物が無くなっても幾日かは大丈夫だが、水がなくなるとすぐ死ぬ。病気どころではない、生きることが先決問題となっている。

ジャララバードで難民の受け入れができなくなると、パキスタンに難民が多く流入する。そこで井戸を掘り、水を確保する計画を立てた。660カ所の井戸を掘り30万人の難民をくい止めた。

アフガニスタンには1000万発の地雷が落ちていて、井戸を掘るときに大きな石があると、地雷から火薬を取り出して爆発させる。我々は爆発物の取り扱いに慣れていない。一番深い井戸で61メートルもある。これを手堀で掘る。

井戸を掘ったおかげで麦畑が復活した。青々とした麦畑を見たときに感動した。このような時、経済制裁が強化された。制裁は食料にまで及んだ。

2001年3月。カブールに日赤の病院以外に診療所がなくなってしまった。ペシャワール会はカブールにも診療所を5カ所作ることにした。

この時からカブールには自由があった。野菜があふれ、ショーウィンドにはドレスが飾られていた。露天は並んでいたし、テレビもあった。しかし電気は2～3%位しか行き届いていない。タリバンの指揮官が夜中にこっそりテレビを見ていたりしていたこともあ

た。

最近のニュースで、「タリバン後に自由がおとづれた」と言っているが、私がいたカブールには自由があった。カブールの人は、おおむねタリバンのもたらした秩序を歓迎していた。宗教的な制限を守れば秩序は保たれていた。

正義の味方アメリカが、悪の権化タリバンを打つというのは、本当なのであろうか。アメリカが攻撃した場所はだいたいわかるが、軍事基地とは思えない場所を爆撃している。

ペシャワール会は、トラックが通過した1時間後に道路が封鎖されるというギリギリまで、カブールで食糧の配給を行っていた。そこで現地スタッフが、様々なことを見た。タリバンや協力者、パシュトゥン人が殺されていた。頭に5寸釘が打ち込まれた首が300もさらされたり、数百名が殺され路上に転がっているのを目撃している。

攻撃は「終わりの始まり」

カブールが解放軍を受け入れたというのは私にはフィクションに思える。ニュースで報道されていることよりも、私は現地スタッフの話を感じる。このような状態だがカブールの子どもは明るく笑っている。日本に帰ってみると、日本の方が暗い顔をしている。

なぜ世界で一番豊かなアメリカが、世界で一番貧しい国の一つに、あんなにムキになるのか。持っているから、失うものがあるのだろう。アフガニスタンの人は失うものを持っていない。

日本に帰ってきたらみんなが熱に浮かされているようだ。おまけに日本の軍隊が出ていく。これはいったい何なのだろうか。一方、アフガニスタンの情報は極めて少ない。私のような田舎医者が話をしなければいけないほど情報がない。

アフガニスタンへの攻撃は、「これで終わり」ではなく、「終わりの始まり」だ。

「いのちの基金」

寄付金振込先
郵便振替口座番号 01790-7-6559
加入者名 ペシャワール会
※通信欄に「いのちの基金」とお書きください。